

見えないからこそ「見える」こと

金子恵妙（大学院生）

福場さん、『やさしい想像力』に満ちたお話をありがとうございました。原稿を読まれているのではと勘違いしそうなほどすらすらとしたお話を聞いていると、福場さんの全盲に気づかない患者さんが多いというお話に納得が이었습니다。そして、機能的には見えてなくても、福場さんの豊かな想像力が誰かを「見つめる」ことを可能にしているのだと感じました。

福場さんの講義があった日、家で高2の娘と話をしました。娘の周りには医師を目指す人もいますが、「そういう感じの子だから」と自分とは別の世界の人だと思っていたようです。例えば家が経済的に豊かであり、そして自分に自信があり、クラスでも目立っている人です。いわゆる「陰キャ」と自認している娘は「生まれもよくて人生も順風満帆な人」と勝手にイメージづけをしていました。

そんな娘は福場さんのことを教えると少し驚いた様子でした。そして、「ないほうがやっぱりいいけど、大変な経験って視野が広がるんだね」とボソッと言いました。どうしても医師の方と聞くと「エリート街道まっしぐら」な感じがありますし、実際に患者の気持ちに寄り添うのが苦手そうな先生もいらっしゃいます。でも、福場さんは違いました。「病気が一步前に出たら自分も」と前に出てこられた。そして当事者としての立場も理解されています。診察室を出れば私は助けてもらう方。その立場のスイッチングのなかで先生は心を見る（診る）視力を上げてこられたのだと思います。

もちろん誰もが福場さんのように病気に向き合うことはできません。でも、そういう方がいること、そういう医師がいらっしゃること、そしてこうやってご自分の経験とそこから得たお考えを話してくださることで、私の娘を含め多くの人をエンパワメントしてくださっているのだと思いました。

現在ソーシャルワーカーとして困り感を抱えている方と接する立場にいます。先生が話された「3つの回復」でいえば、社会的回復や心理的回復に当たる部分です。「自分を振り返る気持ちを忘れず、チームで」というお話を忘れないようにしたいと思います。そして何より先生から学びたいと思ったのは「謙虚さ」でした。私もいろいろな仕事を経験し、それぞれの立場に立つたびに「わかっていた気になっていた自分」を反省してきました。いろいろな方のお話をお聞きし、いろいろな経験をすることが傲慢につながってはいけません。いつも「分かっていない自分」を忘れないようにしようと思いました。

その美声をお聴きするだけでもうれしかったです。次回はぜひお歌を生で聞かせていただきたいと思います。私の娘がそうであったように、ぜひ福場さんの経験やそこから得てこられた思いをこれからもたくさんの方に届けてください。

改めてこの度は貴重な時間をありがとうございました。